

平成11年度は、キリシタン文献の分析のため、ノートパソコンによるインターネットなどの通信技術を駆使して国内外の図書館等公共機関から情報を収集すると同時に、関連図書の購入・文献複写・マイクロフィルムからの焼付等によって収集した資料をデータベース化することによって、共同研究の幅を広げるための基礎を作る。「設備備品費」にノートパソコン、「その他」に複写費、現像・焼付費、通信運搬費を計上したのは、上記の計画のために必要と判断したからである。

研究代表者は、キリシタン文献の翻訳方法について、原典との異同を明確化し、研究分担者は、大航海時代の修道会と日本について、文化・歴史の観点から比較検討する。そのうえで、両者の研究を総括的にまとめるために、E-mail等によってデータを共有しつつ、日常的な連絡を緊密にする。

B03 『シャーナーメ』の伝承とイラン人意識の形成

研究代表者 羽田 正
東京大学東洋文化研究所 教授

研究分担者 柘屋 友子
国立民族学博物館 助手

研究目的

(1) 『シャーナーメ』に見られる古典的な「イラン人意識」と近代的なイラン国民意識の関係の解明。

『シャーナーメ』に見られる古典的な「イラン人意識」が、近代西欧に源を発する「国民意識」とどのような関係にあるかを考察する。『シャーナーメ』におけるイラン人意識とはいかなるもので、それは歴史の中でどのように表象されてきたものなのかを明らかにする。

また、今日のイラン国内でペルシア語を常用語としない人々（トルコ系、アルメニア系など）にとって、ペルシア語の古典『シャーナーメ』はどのような意味を持つものなのかを明らかにする。

(2) 美術史における『シャーナーメ』の位置の研究。

『シャーナーメ』の挿し絵入り写本の所在を確認した上で、整理、分類作業を行い、『シャーナーメ』を美術史的に研究する際の基礎的なデータを作成する。タイルを含む陶器、金属器に引用された『シャーナーメ』の詩句や造形表現を統計的に調査し、それらが美術品自体にとってどのような意味があるのかを考える。

以上二つの研究を組み合わせることによって、『シャーナーメ』の総合的な研究を行なう。

研究計画・方法

- (1) 現存する『シャーナーメ』の写本の調査をイランと欧米で行い、その主要なものはマイクロフィルムの形で取り寄せる（羽田・柘屋）。
- (2) 『シャーナーメ』の刊本各種を購入し、写本マイクロフィルムと比較しながら、その読解や分析を開始する。（羽田・柘屋）
- (3) 主としてイランで『シャーナーメ』の詩句の記された美術品を調査し、そのデータを収集する（柘屋）。
- (4) パリ国立図書館のペルシア語関係司書F. Richard氏を招聘し、写本関係の研究会を開く。

B03 近現代社会における西洋古典学の継承 フランスにおける文学研究と文学史の成立

研究代表者 中川 久定
京都国立博物館 館長

研究分担者 多賀 茂
京都大学総合人間学部 助教授

研究目的

(1) 文献学に基礎を置いていた16・17世紀までの西洋古典学の中心的流れは、近現代社会において、文学研究と文学史（両者を総称して、広義の文学研究と呼ぶこともできる）に形を変え、その結果、新たに両者に分岐・包含されつつ継承されることになった。本研究の目的は、上記の歴史的過程を明らかにすることにある。

(2) 西欧近現代社会における広義の文学研究の2大分野 狭義の文学研究と文学史 の成立と発展の過程を、西洋古典学の継承という視角に立って統合的に究明しようという研究は、これまでなされてこなかった。本研究は、この大きな欠落を埋めようとする恐らく初めての試みである。

(3) 18世紀以降の社会において文学研究と文学史が明確な形で分岐してくる以前の近代（16 17世紀）古典学の状況に関して、明確な問題意識と方法論をもって、初めて接近したのは『雄弁の時代』（初版、1980年：第2版、1994年）のマルク・ヒュマロリであるが、私たちは、ヒュマロリが修辞学の歴史という視点によって包括的な見取り図を与えた16 17世紀に続く時代に、広義の文学研究がどのように変質して行ったかをたどろうとするものである。

(4) 本研究は、中川がこれまで進めてきた18世紀第3・4半世紀における百科全書派とカトリック神学者との論争に関する研究、および多賀のベネディクト会士の文学・文学史関係書簡の解読の成果に立脚し、そこから出

発する。

研究計画・方法

中川 分担領域：フランスにおける文学研究の成立。デイドロ/ダランベール編『百科全書』（1751 1765年）中の文学関係諸項目を検討し、その文学観をまず検討する。ついで『百科全書補遺』（1776 1777年）の文学関係諸項目に関しても、同じような検討を加え、『補遺』の特徴的な文学観を浮かび上がらせる。

多賀 分担領域：フランスにおける文学史の成立。18世紀にベネディクト会士の間で交わされていた文学研究・文学史をめぐる書簡の整理・編纂事業が、現在、パリ高等研究員（第6部）において進行中であるが、この書簡集の中から、ベネディクト会士が文学史に関して抱いていた認識・方法意識にかかわる部分をコンピューター（設備費使用）によってデータベース化する

研究計画・方法

平成11年度は、中川が「権威による論証」と呼ばれる学問の方法がどのような形で成立したのかの解明にあたる。また高橋は古典解釈を機軸に形成されたヘレニズム期の文献学の成果を、中世写本に残されたスコリア等を資料に解明することを目指す。また西村は古代中世における古典学および古典的教養の実状を中世写本の比較照合から再構成する作業にあたる。これらの研究に必要な第一次資料はすでに相当程度、所属研究機関に設置されているが、研究に精確を期するためにはなお最新の校訂によるギリシア語およびラテン語文献が必要である。また、近年著しく増強されつつある電子化資料を効率的に活用し、かつ研究者相互の情報交換を頻繁に行うために、最新のパーソナル・コンピュータを利用する必要がある。また中世写本の研究は海外のさまざまな研究機関において現在進行中であるため、それらの研究機関との情報交換は研究遂行上欠かせない。

B03 西洋世界における古典の伝承と解釈

研究代表者 中川 純男
慶応義塾大学文学部 教授

研究分担者 西村 太良
慶応義塾大学文学部 教授

高橋 通男
慶応義塾大学言語文化研究所 教授

研究目的

現在のわれわれが手にしている「古典」は、どのような形で伝承されてきたのか。伝承の過程でどのような文化を形成してきたのか。近現代が受け取った「古典」は、たんなる文書遺産ではない。文書を中心に形成されてきた文化の全体である。本研究は西洋においてギリシア・ローマの古典が形成してきた文化と教養の本質を解明し、その再評価を行うことを目的とする。古典解釈はヘレニズム期の文献学者により体系的な学問に仕上げられた。その古典解釈の方法は中世を通じて基本的には継承されている。本研究は、古典の伝承過程に決定的な役割を果たしたヘレニズム期の文献学の成果を解明し、中世において諸学の方法にまで拡大され「権威による論証」と呼ばれるに至った古典解釈の方法を再評価しようとする点に特色を有する。本研究の代表者はすでに研究項目B03「近現代社会と古典」の調整班員として第一回拡大総括班会議等に出席して、他の班員と研究課題についての打ち合わせを行い、古典解釈を機軸に形成された教養の評価が近現代社会における古典の役割を解明するため極めて重要であるとの見通しをえている。

B03 ヨーロッパのレトリック教育

古典との関わりにおいて

研究代表者 月村 辰雄
東京大学大学院人文社会系研究科 教授

研究分担者 浦 一章
東京大学大学院人文社会系研究科 助教授

研究目的

- (1) 目的 本研究は、古代ギリシア・ローマから19世紀にいたる間、ヨーロッパの学校教育カリキュラムの根幹に据えられたレトリック(修辞学)を、とりわけ中世・ルネサンス期の西ヨーロッパの学校教育の現場の中に捉え直し、各種の教育カリキュラムや教科書類の調査を通じて、修辞学が古代ギリシア・ローマの古典作品の伝承・流布にどのように関与したのか、そのメカニズムを明らかにしようとする試みである。
- (2) 特色 本研究はヨーロッパ教育史における古典教育の諸相の解明を射程におさめるもので、学校教育を対象とする関係上、社会史的・文明史的な観点を備えることになる。従ってその成果は具体性に富み、他地域の古典学についての諸研究に対し、格好の比較検討資料を提供することになる。
- (3) 意義 また、古典教育との関連における修辞学の役割の解明をも射程におさめるもので、日本では十分に認識されていないこのヨーロッパ的な学問の諸相を明らかにすることにより、単に古典学ばかりでなく、文学史・

教育学史以下の諸分野をも裨益することが大きいと思われる。

(4) 準備状況 研究代表者月村は「古典学の再構築」計画当初から計画研究担当者として連絡を受け、平成9年度には文部省在外研究員として「フランスのレトリック教育史」をテーマに研究を進め、研究文献の基礎調査を完了している。

研究計画・方法

(1) レトリック教科書類の調査と分析

研究代表者月村は、上記の基礎調査に添って、主として16～18世紀のレトリック教科書類の蒐集と分析にあたる。研究分担者浦は、15世紀イタリアのレトリック教科書類の調査・蒐集・分析を担当する。分析に当たっては、のちの突き合わせ作業をスムーズに運ぶために、全体の構成、典拠となる古典修辞学書、引用例の種類と出典、練習問題の有無、などの参照項目をあらかじめ設定する。

(2) 教育プログラム、学校カリキュラムの調査と分析

月村と浦とは、共同して、イタリア人文主義者の学校、共同生活兄弟団の学校、大学の学芸学部、プロテスタント系のギムナジウム、イエズス会のコレージュなど、ジャンル別に15～18世紀の各種カリキュラム類の調査・蒐集を進め、古典教育の方法と、古典教育に占める修辞学の位置とを分析する。

(なお、対象とする研究資料は、欧米の図書館を通してマイクロフィルムないしマイクロフィッシュの形で蒐集することになるが、多量にわたるため、現像作業と資料整理には研究補助者の助力を期待せざるを得ない。謝金(研究補助)の予定額が比較的多額にのぼるゆえである。)

イシオンをはじめ、ルター最初期(1509-11)の全テキストの新訂版の準備を進めている。この研究は、近代初頭、聖書理解と基督教思想に新しい時代を開いたルターの思想の生成を探る研究を、全く新しい基礎の上に据えるものであり、国際的に数十年来進められてきたルターと中世の諸思想潮流との関係をめぐる研究、また彼の思想の特質を伝統的思考との相違から明らかにする研究を大きく進めることになるものである。これまでに申請者はドイツ学術交流会・東京大学学術基金・ドイツ・フンボルト学術財団・ドイツ連邦大統領シーボルト賞などによる支援を受けて数次にわたるドイツ・イギリス・フランス・スイス・オーストリア等の資料調査を続け、オッカムへの書き込みについては暫定エディションを公表するなど、準備を進めてきている。

研究計画・方法

11年度は、これまでの諸研究の成果をあらためて確認すると同時に、エディション作業として、ドイツ連邦共和国ベルリン・ツヴィッカウ・エルフルト所在のルターテキストのオリジナルにあたっての確認、ルターが引用しない言及する聖書注解・教父文書・中世神学書などの出典の確定(ルターによる本文批判出典指示と、1512年までの初期印刷本の異同の突き合わせによる、厳密な意味で典拠となった版の確認。これは、彼の手元にあって実際に参照した文書は何であり、どの版であったかを探り出す作業である)、および注解作業を行う。手稿オリジナルにあたるためだけでなく、初期印刷本がヨーロッパのさまざま図書館に分散しているため、ドイツの諸図書館をはじめ、大英図書館、パリ国立図書館などへの研究出張が必要になる。ノートパソコンも、その際に携帯する。研究出張は、同時に西欧の専門研究者たちとの情報交換の意味を持つ。また、そのような探索の結果重要性が確認される資料はマイクロフィルムとして手元におく必要がある。現在の諸校訂版・研究文献の必要はいうまでもない。

B03 中世の諸思想潮流とルター - の思想生成

研究代表者 松浦 純
東京大学大学院人文社会系研究科 教授

研究目的

本研究は、「古典学の再構築」研究プロジェクトの中で、古典としての新旧約聖書およびアウグスティヌスをはじめとする教父が、中世から近代への移行期を代表する思想家の一人マルティン・ルターによってどう読まれ、解釈されて新しい思想を生んだかを、西洋中世の諸思想潮流との関連で明らかにすることを目的とする。申請者は、1983年に、それまで知られていなかったルターの後期スコラ学者オッカムへの書き込みを発見して以来、ドイツのルター全集編纂委員会との連絡の下に、そのエデ